



大阪シンフォニカー交響楽団は、年10回の定期演奏会のほか、名曲コンサートや特別演奏会などを主催するプロオーケストラ（以下、プロオケ）である。1980年の創立。いまや在阪4大プロオケの一つに数えられ、年間の公演数は1000回を超える。楽団の25周年記念定期演奏会へ音楽評論家の日下部吉彦氏が寄せた寄稿文にこんな一節がある——「25年前のある日、体格のいい中年女性が、私を訪ねてきた。『私、オーケストラを作ったのです！』その眼は、輝いていた。夢みる瞳とは、このことか——たった一人で楽団を立ち上げたこの女性は、傘寿を迎えようとするいまも、若い音楽家たちに活動の場を与えようと情熱を傾けている。このひとは、まだ夢の途中なのだ。

### 「オーケストラについて 何にも知らなかった」

——まず、オーケストラをつくらうとしたきっかけからお願ひできますか。

「子育てが一段落した50歳のころ、合唱団に所属して、趣味でコーラスを歌っていたのです。伴奏は、近くのいろんなアマチュア楽団の方々にお願いして、コーラスの指導には東京から桐朋学園出身の小泉ひろしさんをお招きしました。かの世界的な名指揮者、小澤征爾<sup>じ</sup>さんを育てた方の愛弟子です。そんな小泉さんがせっかく来てはるのに、コーラスの指導

しきしま・ひろこ  
1929年（昭和4）堺生まれ。音楽好きだった父母の影響で、ごく普通の主婦業のかたわらコーラスグループに参加し、子育てが終わったのを契機に一念発起して80年大阪シンフォニカー交響楽団を創立。90年（平成2）大阪府知事表彰、91年以降4回の大阪文化祭賞、08年に平成19年度（第62回）文化庁芸術祭「芸術祭優秀賞」を受賞し、ルーマニア、ベトナムでの海外公演も成功させるなど、楽団を大阪有数のプロオーケストラに育て上げた。支援組織として88年に大阪シンフォニカー協会が設立され、体制強化が図られている。

大阪シンフォニカー交響楽団代表

## 敷島 博子氏

「人生っていうのは、ほんまに  
50歳を過ぎてからやと思いますね」

だけではもったいないと思っただけです。楽器のメンバーの指導もお願いできれば、たとえ小編成でもオーケストラが組めるんじゃないかと。早速、小泉さんに話を持ちかけたのですが、『とんでもない、お金が一体いくらかかると思っているの!』と一喝されました(笑)」

——プロの指導者から言下に否定されたにもかかわらず、オーケストラを諦めなかったのはなぜですか。

「要は、オーケストラの編成・運営について素人同然で、何にも知らなかったからなんですよ(笑)。だって、楽器はメンバー各自が持っているわけだし、必要なのは練習場所を確保する費用や交通費くらい。息子が大学を卒業して仕送りが不要になった分、貯金に回したお金が100万円ほどあつて、それだけあれば何とかなるだろうと、気軽に考えていたのですね。いまから思えば、本当に浅かな素人考えだったのですが、小泉さんも放っておけないと思われたのか、重い腰を上げていただき、そのツテをたどって京都市立芸術大学の岩淵龍太郎教授(当時)の協力も取り付けて、1980年の夏に楽団員募集のオーディションを行いました。すると、100人を超える応募者が集まってきた、みんな上手で落とすに落とせず、並みのオーケストラよりはるかに多い人数を採用することになったのです」

### 「素人の無手勝流ですが、 よう働いたなあ」

——初演は、同じ年のクリスマスに会津若松で演奏したベートーヴェンの「第九」だったそうですね。

「これも小泉さんの紹介で回ってきた初仕事でした。遠方のうえ、報酬は旅費などすべて込みで50万円でしたから、個々の楽団員にとってはほとんどノーギャラに近い。それでもみんな行くというので、事務所近くの幼稚園の体育館を借りて、練習を重ねました。ところが、2階建てのバスをチャーターして出発する直前、会津地方は25年ぶりの大雪。何とか演奏会場までたどり着いたものの、バスに乗れる人数は限られてましたから、本来は管楽器の奏者が打楽器のシンバルを担当したりして冷や汗もの。演奏自体は好評でしたが、無事公演を終えたときはもう涙がポロポロ。いまでも「第九」の演奏でシンバルの音を聞くとたびに、当時を思い出して目が潤んできます」

——その後も運営面での苦労は、並大抵のものではなかったようですね。

「素人の無手勝流ですが、いま思い返せば寝る間も惜しんでよう働いたなあという気はします。何せ、お金がありませんから、節約、節約の連続でした。赤字にならないように他の楽団から楽譜を借りてきたり、コピー一枚を惜しんで手書き

したり。また、公演会のチケットはもとより、チラシ、ポスターに至るまですべて自前でデザインして、1円でも安い印刷業者を探し歩きました。

公演会場の使用料の超過分を心配して、時間内に演奏を終わらせるために指揮者がもう少し早く棒を振ってこないかとヤキモキしたり、会場の収容人数を上回るチケット枚数を販売してしまい、入り切らない来場者へ平謝りしたりと、もうハチャメチャ。演奏会そのものを直前にキャンセルしてきた淡路島の公演依頼主に電話をして、『いまから泳いでそっちへ行ってもええんですよ』と食い下がり、撤回してもらったこともありまし

### 「聴くものも演奏するものも 満足できる音楽を!」

——そうまでして楽団をつくり、守ろうとした情熱の源とは?

「プロの音楽家というのは、プライドが高く世間知らずの方が多いのですが、ひとたび楽器を持たせると、それはもう



第120回定期演奏会(07年9月12日)の公演風景。  
今年3月18日に第133回定期演奏会がザ・シンフォニーホール(大阪市北区)で19時より、同20日には第12回東京公演がすみだトリフォニーホール(東京都墨田区)で15時より予定されている

●上記の両演奏会へ読者の皆さまをご招待いたします(各10組20名さまを先着順にて)。ご希望の方は下記までお問い合わせください  
大阪シンフォニー交響楽団  
TEL 072-226-5522

身震いがして魂を吸い取られるような演奏をします。私は、そんなひとたちを尊敬してしますので、損得抜きで支えていかなければという想いがあるんですね。いわば、子どもを育てるために必死で食糧を得ようとする母親の心に似たものなのかもしれません。いまの日本では、若い音楽家たちの活躍する場がごく限られていますから……」

——現在、日本オーケストラ連盟加盟のプロオケは29ですが、まだまだ少ないと。「オーケストラが盛んな欧米では、人口10万人に一つの割合で楽団が存在するといいますが、もう少し日本でもオーケストラに親しむ機会があってもいいと思うんですね。手前味噌ですが、当楽団では定期演奏会の最上のA席が5000円。一般の方々が聞き覚えのある曲を演奏する名曲コンサートは2000円でご入場いただけます。演奏会をすると、いまでも人件費や会場費で赤字なのですが、地元企業などのサポートをいただいでの出血大サービス。ぜひ一度、演奏会へ足を運んでもらいたいですね(笑)」

——オーケストラの魅力について、お聞かせください。「指揮者の音楽性や編成の仕方によって、楽団ごとにそれぞれ違った魅力があると思うのですが、シンフォニカーの目指しているのは『聴くものも演奏するものも

満足できる音楽を!』。例えば、阪神・淡路大震災から間もない時期に決まっていた楽団主催の定期演奏会。街に残る瓦礫を踏み分けて、たくさんの方に来ていただいた中で、プロگرامを終えた後、震災で亡くなった方々を追悼するために『オーゼの死』という曲を演奏したのです。老母オーゼの死を悼む弦楽合奏の重厚な調べの中、会場のそこからすすり泣く声が聞こえてきました。聴衆と奏者の心が共鳴したのです。こうしたCDでは決して聴くことができない演奏が、当楽団の魅力の一つなのでしょうね」

「いい演奏を追求する初心を忘れぬように」

——楽団創立30周年へ向けての抱負があればお願いします。

「昨年の1月、文化庁芸術祭で『芸術祭優秀賞』を頂戴し、やっとプロオケとして全国レベルで認めていただけたのかなと感無量でした。ここまで来れたのも、小泉さんや岩淵さん、そしてプロオケの何たるかを教えていただいた桂冠音楽監督のトーマス・ザンデルリンクさんなどのすばらしい出会いがあり、さらに地元企業の皆さまなどからのご支援があればこそ。私自身は、10年ほど前からさすがに体力的にきつくなってきて、いまオーケストラの運営は楽団長の息子に任せています。元大手商社マンの彼なら、ビジ

ネス感覚で楽団を経営し、観客の動員や楽団員の待遇改善なども進めてくれるはず。ただし、お金は大切ですが、あくまでもいい演奏を追求する初心は忘れぬように、これからも一人の聴衆として楽団を見守っていききたい。

創立からのメンバーで、当時20代の楽団員ももう50代。血圧やら血糖値がどうのこうのと話すようになって、『代表も、ようまあ50歳過ぎてから楽団つくろうなんて思いはりましたなあ』なんていうもんやから、ネジを巻き直してやりました。「何いうてんの、あんたらまだまだこれからよ!」って(笑)。人生っていうのは、ほんまに50歳を過ぎてからやと思いますね」



大阪シンフォニカー交響楽団のさらなる発展を牽引するひとたち。音楽監督・首席指揮者を務める児玉宏(写真上)、正指揮者の寺岡清高(同右、©西沢宏)、今年4月に首席客演指揮者に就任予定のキンポー・イシイ=エトウ(同中)、楽団長の敷島鐵雄(同左)の各氏 P.3の写真撮影/加藤文哉、その他は提供/大阪シンフォニカー交響楽団